



最新の医療設備と心休まる空間を備えた新病院

着工から丸3年の歳月を経て、生まれ変わった庄原赤十字病院。新耐震基準を満たした構造になり、古い建物では確保できなかった待ち合いスペースや診療スペースを確保。最新の医療機器、手術室が備えられ、高度医療への対応、救急機能の充実が図られている。

増改築に対し市が支援
庄原赤十字病院はその課題の多くに対応できる増改築を決定し、工事に着手。市は、地域医療を守り、安心して暮らせる社会実現のために、この増改築に対して財政支援を行っている。
庄原赤十字病院は、入院治療を必要とする重症救急患者を受け入れる「二次救急指定病院」であり、災害時に発生する患者に対応する「災害拠点指定病院」に位置付けられ、救急医療・高度医療に対応できる総合病院。増改築工事の完了で、本市の地域医療の拠点としての役割がより一層期待される。



※庄原赤十字病院
日本赤十字社広島県支部が設置する病院。庄原市と三次市で構成される備北二次保健医療圏の中核病院の一つであり、広島県災害拠点病院に指定されている。
※広島県災害拠点病院
県内や近県で災害が発生し、通常の医療体制では被災者に対する適切な医療を確保することが困難な状況となった場合に、広島県知事の要請により傷病者の受け入れや医療救護班の派遣などを担う病院。



広くゆったりとした診療室・通路

どのフロアも幅広い通路とゆったりとしたスペースが確保され、待合室・診療室も広く快適に受診できる。診療室は全て個室になり、待合室や外に音が漏れにくく、プライバシーにも配慮されている。



利便性が向上した正面玄関・駐車場

以前から105区画増の375台が止められる駐車場となり、バスの乗り入れができるロータリーを設置。玄関は開放的になり、吹き抜けのエントランスには床暖房が整備されている。災害拠点指定病院として被災した傷病者をいつでも受け入れられるよう病床機能も備えられている。



特集

続・地域医療を守る

～地域医療の拠点 庄原赤十字病院増改築が完了～

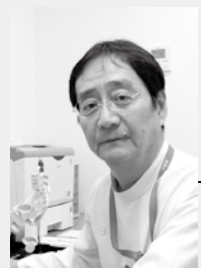
平成23年2月から進められていた庄原赤十字病院の増改築がこのたび完了しました。地域医療の拠点施設として、今後の役割に大きな期待が寄せられます。本市の地域医療の中核を担う庄原赤十字病院の新たなスタートとともに、改めて地域医療について考えます。





整形外科
副院長
だいさくひろかず
大作浩一 医師

多くは骨折をはじめとする四肢の外傷、関節疾患を診えています。年齢層は幅広いですが、やはり高齢者の方が多いですね。高齢になってくると転倒が増え、骨粗しょう症も関係し、転ぶと骨折につながります。また、変形性膝関節症の患者さんも多く、膝が痛くて歩行がづらくなった患者さんには、人工膝関節置換の手術が有効です。手術室・設備が新しくなり、格段に手術しやすくなりました。現在整形外科医は4人体制で、うち3人が整形外科専門医なので、通常の疾患にはほとんど対応できます。より高度の専門治療が必要な場合は専門の医療機関を紹介しています。



泌尿器科
いわきつくろ
岩佐嗣夫 医師

年を重ねると、前立腺肥大症、頻尿、膀胱炎、腎盂炎、悪性腫瘍などの確率が高くなり、こうした疾患に対して私たち泌尿器科医が診療します。現在、一日平均40～50人を2人で外来診療しています。高齢患者の約7割の方が頻尿を自覚されていますが、実はそのほとんどが機能障害です。長年働いてきた膀胱の筋肉に障害が起き、尿が溜められなくなってきました。有効な薬物治療がありますので、恥ずかしがらずに相談してください。

手術後など体を自由に動かさない人の状態を改善するリハビリテーション。市内で唯一、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士の3職種が揃い、患者の状態に合わせてリハビリをサポート。都市部の病院では、手術後1月程度で退院を勧められるケースも多いが、ここは患者の状態に配慮し、入院の期間を長くとするよう努めている。中島浩一郎院長は「市内にはリハビリできる施設はほかにない。特に高齢の方がここに通うには負担が大きい。できるだけ回復してから退院してもらおうことが、私たちの願い」と力を込める。

**患者に合わせて回復をサポート
リハビリテーション部門**

し、この地域に沿った優しい診療、患者と家族に寄り添った支援を行っている。



リハビリテーション室

以前はフロアが分離されていて使い勝手がよくなかったが、ワンフロアになったため利用しやすくなり、窓が広くとられ開放的なつくりになった。患者からも「明るくなり、外の景色を見ながら気持ちよくリハビリできる」と好評。



リハビリテーション部門
医療技術部
理学療法技術課
いのうえかずあき
井上和章 課長

ここでは理学療法士、作業療法士、言語聴覚士の3つの職種で患者の皆さんの回復をお手伝いしています。一日でも早く自宅に帰ってもらえるよう支援することはもちろん、退院後も安心して生活に戻れるよう、家族の方ももとより、地域の方やケアマネージャー、ホームヘルパーの方などと連携し、かかわれる方みんなでサポートします。病院内でも医療専門職だけでなく、ソーシャルワーカーなど多くの職種がかかわっています。

合同カンファレンスなどでしっかりと情報共有し、本人と家族の要望にできるだけ応える形でサポートを行っています。

増加する高齢者に対応する医療を提供

年を取ると起こりやすくなる症状や疾患がある。高齢者比率が39%の本市。高齢者の多い庄原市は、おのずとそうした疾患にかかる人が増えてきている。庄原赤十字病院では、高齢者がかかりやすい専門科を充実

これまで3室あった手術室は4室に増え、室内には高度な手術が可能。最新機器を導入。大手術を行うのに必要なスタッフが十分入室可能なスペースを確保。これにより高度な手術ができる医師を呼び寄せることが可能になり、都市部で受けられるような治療が庄原市内で受けられるようになった。

**機能の発揮には対応できる
医師確保が重要**



外科
たかしまひろし
高島寛年 医師

消化器が専門ですが、消化器以外にも肺がん、乳がん、甲状腺、足の静脈瘤も手術しています。常勤の外科医は3人。現在は岡山大学の全面的なバックアップがあり、特に難しい食道がん、腹腔鏡による胃がん・大腸がん手術、膵臓がん、肝臓がんなど困難な手術症例は、岡山大学関連の高名な医師に執刀をお願いし、体の断層写真や内視鏡写真を事前に大学病院に送り、執刀医と話をしながらベストの手術を選択します。患者さんとはしっかりとコミュニケーションをとり、患者さんにとって治療を受けやすい場所での手術を勧めています。県内でも最も合併症の少ない病院の一つですので、安心して受診してください。

救急・高度医療機能が充実

市内で唯一の救急・高度医療に対応できる庄原赤十字病院。市民からその機能充実を望む強い声があった。救急入口からHCU（集中管理病棟）、手術室までの動線が確保され、さまざまな急病者に対応。新しく整備された最新医療設備が、これまでできなかった手術・治療を可能にしている。



①備北で初めての症例となった腹臥位完全鏡下食道がん手術の様子。最新医療機器導入で高度な手術が可能になった。②救急入口は一般患者の入口と分けたことで、救急車が続けて3台到着しても対応が可能になった。手術室までの動線も確保され、スムーズな受け入れ態勢で、さまざまな救急に対応できる。



●救急外来・救急車搬入数（単位：人）

年度	H 21	H 22	H 23	H 24
救急外来	8,501	9,101	9,135	※8,753
うち救急車搬入	1,021	974	1,156	※1,268

※救急外来1日平均24人
※救急搬送1日平均3.5人



麻酔科
なかむらゆうじ
中村裕二 医師

外科などの手術は、麻酔科医がいなければできません。麻酔は手術中に患者さんの安全を守るといえることが最大の目的であり、我々の主たる仕事です。また、疼痛緩和を伴うペインクリニック、救急搬送された患者さんや手術後の集中治療管理も行っています。当院では常勤の麻酔科医が3人、毎週1回島根大学から、月2回岡山大学から応援があるので、以前はできなかった手術が可能になり、患者さんがどんな容態でも対応できる状況です。市民の方の期待に応えられるよう頑張っていきます。

庄原赤十字病院の主な診療科

小児科
金丸博 医師

小児科は赤ちゃんから中学生までを担当しています。医師は2人のため、救急では他科の医師に協力いただきながら、365日小児科医が患児を診ることのできる体制としています。予防接種、乳児健診も行っています。

皮膚科
原 武 医師

皮膚科医1人体制ですが、湿疹、水虫、良性・悪性皮膚腫瘍をはじめとした一般的な皮膚疾患を全般に診察しています。地域住民の皆さんの皮膚に関する症状を少しでも楽にできるように診療を行っています。

耳鼻咽喉科
尾野里奈 医師

耳鼻咽喉科は、耳・鼻・のどはもちろんのこと、めまいや頸部疾患の診察も行っています。庄原市には現在、耳鼻科専門の医療機関はほとんどなく、当院では子どもから大人まで気軽に相談できる雰囲気づくりに努めています。

循環器科
杉野浩 医師

医師4人で狭心症・心筋梗塞といった虚血性心疾患、心不全、不整脈、高血圧、種々の動脈硬化性疾患の診療にあたります。最新の血管内治療を行い、24時間体制で緊急疾患に対応し、地域の循環器病の第一次医療も担います。

内科
鎌田耕治 医師

あらゆる内科疾患を総合内科医として診療にあたっています。特に、消化器疾患では肝臓・胆膵・消化管の専門医が、内視鏡、カテーテル、経皮的治療といった手術を伴わない、体に負担の少ない治療法を積極的に行っています。

脳神経外科
廣畑泰三 医師

脳神経外科とは、脳、脊髄、末梢神経系およびその付属器官（血管、骨、筋肉など）を含めた神経系全般の疾患の中で、主に外科的治療の対象となり得る疾患について、診断、治療を行う医療の一分野です。

透析外科
柳川泉一郎 医師

人工透析とは腎不全に対する対症療法です。当院では血液透析と腹膜透析のいずれもを行っています。生涯にわたって病院へ通院していただく必要がありますが、通院が苦痛にならないように努めています。

眼科
向井聖 医師

主に白内障や緑内障、糖尿病網膜症などの診療を行っています。緑内障は主に薬物治療を行いますが、薬物治療で改善されないケースは広島大学病院や近隣の病院へ紹介しています。白内障も手術が必要であれば紹介しています。

拠点病院・地域医療を支える協働の輪

今、全国で地域医療の崩壊危機に直面している。それは慢性的な医師不足にある。本市でも、医師の確保は大きな課題であり、診療所の継承や医師の高齢化、看護師の不足も継続的な課題となっている。この現状を打破するため、医療関係者と市民とが協働して地域医療を守るためのさまざまな活動を進めている。



市全域の総合的地域医療の確保を目指す「地域医療を考える会」

将来にわたり市民が安心して暮らせる地域医療の確保と、庄原赤十字病院と診療所の連携の強化、医療体制の整備を目的に、庄原赤十字病院、庄原市医師会、市の3者で「庄原市の地域医療を考える会」を平成21年に発足。

医師や看護師の確保、二次救急医療における勤務医の負担軽減、庄原赤十字病院の施設と機能の充実など、本市の地域医療を守るために必要な対策を検討・実施し、これまで継続的な活動を行っている。

医師・看護師志望の学生を支援

考える会の取り組みの中から市は、平成21年度、市内の医療従事者不足を解消することを目的に、医師や看護師を目指す人を支援する「庄原市医療従事者育成奨学金制度」を創設。

この制度を利用した人は4年間で70人に上る。平成23年4月には看護師として2人が庄原赤十字病院に就職。以降22人が庄原市内の医療機関に就職している。

地域医療への市民意識の高まり

また、「地域医療の課題の解決と

小児科医を守りたいと願う母親たちが立ち上げた「小児医療を考えるひだまりの会」

市内で唯一小児科がある庄原赤十字病院から小児科医がいなくなるという不安を抱いた「庄原子育て支援センターひだまり広場」に集う母親たちが平成21年10月、「庄原の小児医療を考えるひだまりの会」を立ち上げた。

24時間365日の診療体制の中、入院する子どもの回診や夜間・休日の救急対応など、十分な休息が取れない環境で働く小児科医の負担を軽減しようと、自分たちのできる行動を実践。病気に関する正しい知識や上手な受診の仕方を学ぶ学習会を開いたり、小児科医と意見交換会を実施したりするなど、精力的な活動を続けている。



庄原の小児医療を考えるひだまりの会 代表
八谷るり子さん(左)
森岡 早苗さん(右)

賞をいただいたことで、私たちの活動がより多くの方に知っていただく機会をいただいたのだと思っています。当初は手探りの中での活動でしたが、皆さんから声をかけていただくことも増え、活動の幅も広がりました。メンバー全員が子育てしながらの活動のため、時間が取れないことも多くありますが、小児科を庄原からなくさないために、微力ですが、自分たちのできる範囲で活動をしていきたいと思っています。

地域医療を守る先駆的な取り組みに評価

小児科医の負担軽減につながる取り組みの効果が少しずつ出始め、こうしたかかわりから医師や看護師とのコミュニケーションも深まり、お互いに信頼関係が築かれてきた。

会員の創意と工夫にあふれた自主的な活動が認められ昨年12月、広島県いきいき地域づくり賞を受賞。地域医療を守ろうと活動する市民グループは県内には他にないことか



広島県いきいき地域づくり賞表彰式後、湯崎英彦県知事と。

ら、医療関係者からも注目を集めている。地域医療を守っていく取り組みモデルとして、これからの活躍にも期待が寄せられる。

地域医療充実には何が「必要か」を市民と一緒に考えるシンポジウムを主催。テーマを変えながら議論を深める中で、回を重ねるごとに市民の参加が増え、地域医療に対する意識の向上に結びついてきている。

●庄原市医療従事者育成奨学生の内訳【平成22年度～25年度実績】

1. 医療従事者育成奨学金貸付決定者の状況 (H25.6現在)

職種別	医師	看護師	准看護師	助産師	合計
H22 決定分	2	16	1	0	19
H23 決定分	1	23	3	1	28
H24 決定分	1	15	1	0	17
H25 決定分	2	12	0	0	14
合計	6	66	5	1	78

2. 市内への就職状況 (H25.4現在)

区分	H23年	H24年	H25年	計
医師	0	0	0	0
看護師	2	7	12	21
助産師	0	1	0	1
計	2	8	12	22

※4月採用

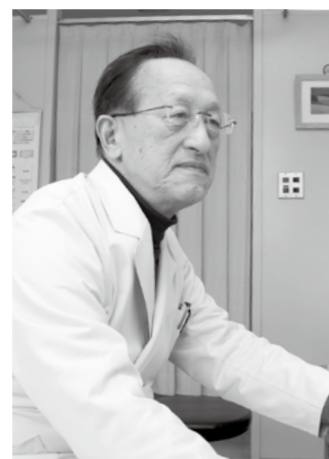
※うち看護師の辞退者8人

一人一人の心掛けが地域医療を守ることにつながります

休日診療センター設置の目的は、庄原地域以外の人々が当日診療する医療機関がどこにあるか分からないという声があることから、休日に診療する場所を一つにして分かりやすくすること。そして、庄原赤十字病院の勤務医師の負担を減らすことにありました。

センター設置前は、庄原赤十字病院を受診する軽症患者の増加によって、本来担う二次救急医療に支障を来し、急患の治療が遅れる懸念が高まっていました。

開始から10カ月が経過し、一次救急医療と二次救急医療を区分けした成果が出始めています。実際に庄原赤十字病院を受診する軽症患者が確実に減っています。医師会も庄原市の地域医療を考える会として、医師の負担軽減や受診の仕方などを皆さんに呼びかけてきましたが、市民の皆さんの受診する際の心掛けが地域医療を守ることにつながっていきます。まずは休日診療センターで受診してください。



庄原市医師会
ちゅうりょう あきお
毛利 昭生 会長
(毛利内科胃腸科医院 院長)

一次救急に対応する休日診療センターを運用

庄原赤十字病院北側に休日の急病患者に対応する「庄原市休日診療センター」が開設され、昨年4月7日

から診療が行われている。休日診療センターは休日における一次救急(入院を必要としない程度)の救急医療を行う医療機関として、庄原市医師会から派遣される医師が診療業務を担っている。

魅力ある制度 やりがいある仕事に就けた

庄原市の奨学金制度は、入学した三次看護専門学校で知りました。親に負担をかけたくないという思いがあったので、庄原市内の病院に勤めれば免除になるというのも魅力で、利用させていただきました。この仕事は奥が深く、難しい場面も多く感じますが、とてもやりがいを感じています。早く一人前の看護師になれるよう頑張ります。



看護師
いしはら
石原 蓮 さん
22歳。三次市三良坂町出身。昨年4月から庄原赤十字病院に勤務。

医療従事者育成奨学金制度

市内の医療機関などに医師、看護師、助産師として勤務しようとする方に対し、修学などに必要な資金を貸し付ける制度。
資格取得後、市内の医療機関などに医療従事者として一定期間勤務すれば、奨学金の全額か一部が免除され、返還の猶予制度もあります。
現在、本奨学金の平成26年度奨学生を募集中です。この制度に関する詳細は、保健医療課医療予防係(☎0824-73-1155)にお問い合わせください。

庄原市休日診療センター

- 診療日 日曜日、祝日、年末年始(12月30日～1月3日)
 - 診療時間 9時～17時 ※受け付けは16時45分まで。
 - 診療科 内科 ※日によって医師が異なります。
- ※小学生以下の方は、庄原赤十字病院小児科で受診してください。
問い合わせ：休日診療センター ☎0824-72-9900
(診療日以外は保健医療課 ☎0824-73-1155 へ)

皆さんの暮らしの安心
いちばんづくりに
全力で取り組みます

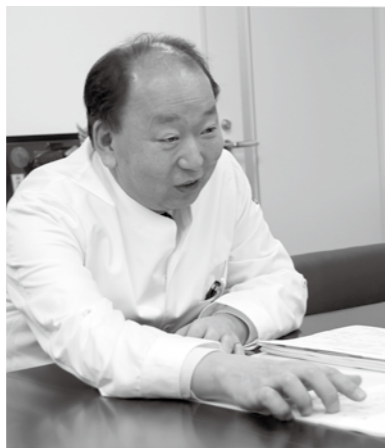


木山 耕三 市長

以前は当たり前前に存在したものが、時代や社会情勢の変化により当たり前でなくなったり、できなくなったりしています。それは医療の面にも表れており、このまま手をこまねていると、地域医療も崩壊していきます。そのような危機感から、医師会、庄原赤十字病院、市で「地域医療を考える会」を組織し、地域医療を守る取り組みを進めてきました。

今回の記事でご紹介したとおり、庄原赤十字病院は実に多くの役割を担っています。慢性的な医師不足と身近な診療所医師の高齢化が進行する中で、一般診療所の側面を持ちながら、高度医療や救急医療にも対応する庄原赤十字病院は、正に「本市地域医療の砦」であると考えています。市民の健康と生命を守るため、病院機能の充実を図ることは、都市部で勤務する医師にもアピールがで

きるという医師確保の観点と、何より市民の暮らしの安心につながることから、市は庄原赤十字病院の増改築に対する財政支援を行いました。また、懸案となっている産科医療の再開も、院長をはじめ関係者の長年のご尽力により、再開まであと一歩のところまで来ています。一日も早い再開に向けて、引き続き協力と支援を行ってまいります。



私たちには
地域医療を
守る責任がある

なかしまこういちろう 院長
中島浩一郎

昭和30年生まれ。山口県出身。広島大学卒業。庄原赤十字病院在職30年。平成21年1月1日から現職。

典型的な中山間地である庄原市は、医師不足の影響をもの受けやすい。多くの病院がある中で、選んでもらうには他にはない魅力がある。地域医療を守るためには、とにかく医師の確保が必要という認識のもと、医師が庄原に来てもらいやすい環境づくりに力点を置く。もともと庄原市は「魅力がある場所」だと中島院長は言う。「庄原に

救急・高度医療を提供し
市民の期待に応える

若い医師が病院選びの条件としてあげる「高いレベルの医療」の提供にも力を入れる。常勤の麻酔科医が増えたことで、多くの手術が可能になった。心臓の手術や肝臓移植など、専門病院に依頼するような特殊なもの以外は、大学病院など都市部の病院と同等の医療が提供できるように

患者に寄り添う姿は、救急医療への対応にも表れる。庄原赤十字病院では可能な限り救急車を断らない。ここが断ってしまったら、市内ではどこも受け入れてくれるところがないからだ。このことは病院に対する信頼にも直結する。「市民に信頼されなければ病院の存在意義はありません。市民の期待にできるだけ応えられる病院、医師からも市民からも選ばれる病院を目指します。」

継続的な医師の確保に取り組む

「庄原市の地域医療を守っていくのは私たちの責務」。庄原赤十字病院で30年、本市の地域医療を担ってきた中島浩一郎院長は、平成21年の院長就任以来、その思いをより強くし、地域医療を守るために「庄原赤十字病院が果たすべき役割とは何か」を常に考えてきた。

活躍する移動診療車
へき地医療の最前線

庄原市・三次市・神石高原町と、へき地医療拠点病院（市立三次中央病院・庄原赤十字病院・神石高原町立病院）でつくる広島県北部地域移動診療車運行協議会は、医師のいない地区で通院することが難しい住民の受診機会を確保することを目的にした『へき地医療拠点病院による移動診療車』の運行を、平成24年7月からスタートさせた。



移動診療車は現在、毎週火曜日と木曜日に運行され、市内では東城町帝釈地区の8カ所を巡回する。診療は午前と午後1カ所ずつ、一日2カ所で行い、隔週で同じ曜日、同じ時間に行っている。帝釈自治振興区が地区全戸に運行日程表を配布しているため、利用者はその表を確認して予約することができる。予約なしでも診療は受けられ、地区の方以外の方も受診が可能。

自治振興区も運営に協力

診療には広島大学病院の研修医も同行し経験を積ませるなど、へき地医療を担う医師の育成にも貢献している。

中四国初の事業

移動診療車を患者の居宅近くまで巡回し、定期的な診断や治療を行うというこの事業は、中国・四国地方では初めての事業で、地域医療の確保に大きな役割を果たすものと期待されている。

6カ月で665人が利用
待ち合いが住民の集う場所に

これまでの利用実績は平成24年7月〜平成25年12月までで延べ665人。一日平均約6人の利用があり、日によっては受診者がいないこともあるが、利用者からは好評だ。10月から利用しているという一人暮らしの80歳の女性は「病院で診てもらおうとすると、移動と待ち時間などで1日かかってしまう。だけど、移動診療車はすぐに診てもらえてとても助かっています」と話す。また、移動診療車が運行されることで、待ち合いとして利用される集会所が地域住民の集いの場所になり、住民同士の交流の場にもなっている。

●利用者インタビュー



田辺正子さん(左)
田辺洋子さん(右)
(ともに東城町帝釈宇山)

近くに来ていただけるということで検査をお願いしました。自分の健康状態が分かるいきっけになりました。健診の受け方や健康管理の話などもでき、必要であれば庄原赤十字病院の専門の先生を予約してもらえるので、わざわざ時間をかけて病院に行く必要がなく助かっています。(正子さん)

以前は三次市内の病院にかかっていたのですが、この地域に月に2回来ていただけ、すぐに診てもらえるのでとても便利です。時間もたっぷりあり先生と色々な話ができて、私にはぜいたくな時間で、ありがたいという気持ちです。今後も利用させていただきたく思います。(洋子さん)

将来は総合医として
地域医療に携わりたい

私は学生のときに一週間庄原に研修に来たことがあり、そのときに感じた皆さんの温かさが印象に残っていて、再度庄原赤十字病院を研修先に選びました。私の実家も庄原のような田舎で地域医療にはとても関心があります。そのために、実際に地域に出て多くの情報を得ること、地域医療を取り巻く環境を知ることは大きいです。将来、患者さんを1人で全て診療できる総合医となり、地域医療にも携わりたいと思っています。



えとうしろうへい 江藤 昌平さん

27歳。広島大学病院内科部地域医療研修医。福岡県出身。